

彼岸の人

長田 弘

春の日、あなたに会いにゆく。

あなたは、なくなった人である。

どこにもいない人である。

どこにもいない人に会いにゆく。

きれいな水と、

きれいな花を、手にもって。

どこにもいない？

違うと、なくなった人は言う。

どこにもいないのではない。

どこへもゆかないのだ。

いつも、ここにいます。

歩くことは、しなくなった。

歩くことをやめて、

はじめて知ったことがある。

歩くことは、ここではないどこかへ、



遠くへ、遠くへ、どんどんと、

どこかへゆくことだと、ずっと思っていた。

そうでないということに気づいたのは、

死んでからだった。もう、

どこへもゆかないし、

どんな遠くへもゆくことはない。

そうと知ったときに、

じぶんの、いま、いる、

ここが、じぶんのゆきついた、

いちばん遠い場所であることに気づいた。

この世からいちばん遠い場所が、

ほんとうは、この世に

いちばん近い場所だということに。

生きるとは、年をとるということだ。

死んだら、年をとらないのだ。

十歳で死んだ

人生の最初の友人は、

いまでも十歳のままだ。



病いに苦しんで
なくなった母は、
死んで、また元気になった。

死ではなく、その人が

じぶんのなかに遺していった

確かな記憶を、わたしは信じる。

言葉って、何だと思う？

けっして言葉にできない思いが、

ここにあると指さすのが、言葉だ。

話すこともなかった人とだって、
語らうことができると思ったのも、
死んでからだだった。

春の木々の

枝々が競いあつて、

霞む空を掴もうとしている。

春の日、あなたに会いにゆく。

きれいな水と、

きれいな花を、手にもつて。